

第 10 章

資料：1960 年代のコンゴ東部反乱とルワンダ系住民

武内 進一

はじめに

1990 年代以降、ルワンダ、ブルンディを中心とする大湖地域は継続的な紛争状態にある。1990～94 年のルワンダ内戦と大虐殺、93 年以降ブルンディで間歇的に継続する内戦、97 年にモブツ政権を崩壊させ、さらに 98 年以降今日まで続くコンゴ民主共和国（以下コンゴと略する）の内戦と、近年この地域では武力紛争が連鎖的に生じている。これらはいずれも、戦闘の主たる目的が国家主権の獲得であるという意味では内戦だが、そのアクターは周辺諸国と密接に結びついており、コンゴ内戦に典型的に見られるように、紛争への周辺国の介入を招いている。

大湖地域における紛争の頻発と連鎖、そして周辺国への越境を考えると、ルワンダ人移民・難民の問題は決定的に重要である。ルワンダ内戦の火蓋を切ったのは、植民地期末期以降ウガンダに逃れたルワンダ難民の第 2 世代であったし、2 度にわたるコンゴ内戦はいずれも東部のルワンダ系住民によって武装闘争が開始されている。大湖地域では、ルワンダを中心として、紛争が難民や移民を生み、また難民・移民が紛争を生むという循環的な関係が続いてきたのである。

周辺国に対するルワンダ人の移住の歴史は長く、植民地期以前にもコンゴ東部に移り住んだ人々がいる。植民地期にはベルギーが政策的に移民を奨励し、独立以降には自発的な移民が増加した。これに対し、ルワンダ難民の流出入は 2 つの時期に顕著に見られる。すなわち、1959 年から独立（62 年）頃にかけての「社会革命」と呼ばれる政治変動期と、94 年に内戦が終結した後の時期である。「社会革命」期には、それまで支配層の地位にあった少数派エスニック集団トゥチ（Tutsi）に対する排斥、迫害活動によって、多くのトゥチが周辺国へ亡命を余儀なくされた。ウガンダに逃れたトゥチ難民の第 2 世代が中心となって結成されたゲリラ組織が、94 年に内戦に勝利して新政権を樹立すると、旧政権派のエスニック集団フトゥ（Hutu）が大量に難民化して周辺国に流出するとともに、周辺国で

長年亡命生活を送っていたトゥチが大挙してルワンダに帰国した。

ルワンダの移民・難民問題について、筆者は既に幾つかの論考で扱ってきた(武内[1998];[2001];[印刷中])。しかしながら、移民・難民の流出入に関わる政治過程や、移動先の社会における受容のされ方など、依然として十分に究明できていない点も多い。この問題は、ルワンダや周辺国の内政、あるいは先進国や国際機関の対応など広範な領域に関わるため、関連する研究を積み重ねる必要がある。本稿は 1960 年代半ばのコンゴ東部反乱期に焦点を当てた資料であるが、ルワンダの移民・難民問題と地域紛争との関連を総合的に分析するための準備作業として位置づけられる。

コンゴ東部に居住するルワンダ系住民は、北キヴのニャルワンダと南キヴのニャムレンゲに大別される。ごく大まかにいえば、ニャルワンダは植民地期以降の移民や難民がほとんどであるのに対し、ニャムレンゲの場合、植民地期以前からコンゴ東部に居住していた人々が中心である。現在のコンゴ内戦では、ニャムレンゲ、ニャルワンダの双方を中心に反政府武装勢力の一つ(RCD - Goma: コンゴ民主会議ゴマ派)が構成され、それをルワンダが支援している。すなわちルワンダ系住民とそれ以外の地元住民が紛争の中で対立する構図になっている。東部コンゴのルワンダ系住民が周辺社会との間に抱える軋轢は、90 年代に始まったものではない。北キヴのニャルワンダの場合、それは植民地期に遡るが(武内[印刷中])、南キヴにおけるその発端は 60 年代のコンゴ動乱期にある。

周知のように、コンゴは 1960 年 6 月 30 日に独立した直後から、国軍兵士の反乱やカタンガ州の分離独立運動など国家分裂の危機に直面した。国連軍の投入などによりカタンガの分離独立運動は 63 年初頭に収束するが、翌 64 年になると首都に近いクウィル地域および東部地域一帯でまたも反乱軍が蜂起した。この反乱は短期間のうちに鎮圧されるのだが、東部においては、その過程でルワンダ系住民と周辺のエスニック集団との間の関係が悪化した。この時生じた緊張関係が、90 年代の武力紛争に至る伏流をなしていくのである。

1960 年代のコンゴ動乱は、アクターの数といい、紛争の規模といい、非常に複雑な現象である。それでも、カタンガ州の分離独立運動終結までの時期に関しては、ホスキンス[1964(1966)]や小田[1985]などの邦語文献もあって、比較的情報を得やすい。しかし、ルワンダ系住民との関連で重要な 1964 年の反乱に関して

は、十分な分析がなされていない。本稿の狙いは、その空白を埋めるために、事実関係を整理することにある。本稿で示される事実の多くはコンゴ内政に関わるものだが、直接、間接にルワンダ難民・移民に影響を与えた。

本稿は、3つのパートから構成される。第1節は、1963～67年の年表である。東部の反乱が激しかった64～65年が中心だが、カタンガ州の分離独立が終結し、反乱の種が蒔かれる63年から、モブツによるコンゴ国内の平定が概ね終了する67年までを年表に加えた。第2節は、年表に現れる人名の説明である。また、この時期に活動した政治家の来歴を説明するためには、独立前後の政党活動に触れる必要があるので、主要な政党についても説明を加えた。第3節は、この時期の政治過程——特にルワンダ系住民をめぐるそれ——を理解するために重要なトピックに関する資料である。ニャムレンゲの起源については、筆者が既存研究を整理して紹介したが、それ以外の部分は研究書から関連部分を抜粋し、訳出している。コンゴ東部のルワンダ系住民をめぐる問題は、論者の政治的立場によって同じ事象の解釈が異なる場合がある。そのため、まずいかなる論者がどのような主張をしているのかを整理する必要があると考え、関連資料を訳出することにした。

最後に、本資料を利用するにあたっての若干の留意事項を述べる。年表は、Kelly[1993]の記述を基本に作成した。それ以外の文献に依拠して記述した場合は、文末にアルファベット記号で出典を表記した。記号と文献の対応関係については、参考文献を参照されたい。年表や用語説明などに頻出する組織名とエスニック集団名については、付表で整理した。第3節で関連資料を訳出するに際しては、厳密な翻訳ではなく、重要事項に重点を置いた訳し方を心がけた。したがって、意訳や抄訳の部分もあるし、必要であれば説明を補っている。

また本稿では、原則としてエスニック集団名に単数、複数を示す接頭辞（mu-あるいはba-）を付けずに表記する。したがって、「ムトゥチ」や「バトゥチ」ではなく「トゥチ」、また「ムニャルワンダ」や「バニャルワンダ」ではなく「ニャルワンダ」と記す。このような形でエスニック集団名を記すことは、単数、複数にかかわらず表記の統一がとれるという利点を有する一方、実際の語法では常に接頭辞が付されるため、現実には使われない名称表記になるという短所がある。本稿には多数のエスニック集団名が登場するため、やむを得ずこのような形で統一を図ることにした。読者にはその点を留意していただきたい。

